

「ドッグマン」



著者/マーサ・シェリル 著

高月園子 訳 東條隆 監修

(原著: Dog Man: An Uncommon Life on a Faraway Mountain)

発行: アメリカン・ブック&シネマ 発売: 英治出版

ISBN: 978-4903825076 2011年4月発売 ¥2,100



今月ご紹介する本は、マーサ・シェリル著の「ドッグマン」です。

著者はアメリカ人でありながら、秋田犬の復興のために生涯を捧げた、澤田石守衛とその妻喜多子の人生を丁寧な取材を通して、余すところなく表現してくれました。

澤田石守衛は日中戦争に従軍、除隊して三菱鉱業の社員となつてからは、秋田県で水力発電の仕事に携わっていました。妻の喜多子は東京の麻布育ち、電気も通じていない東北の山村で新婚生活を始めることになるうとは夢にも思っていないませんでした。

家族が食べるだけがやつの時代、しかも月給が50円の時代に300円もの大金をはたいて、守衛は衝動的に秋田犬を買求めるのです。

戦時中、秋田犬は将校のコートの毛皮の裏張りや、毛皮のベストにするために、殺されて皮を剥がれていました。そんな時代に守衛は、極力人の目に触れさせないように飼育を続けながら、秋田犬に関する慎重な調査を行い、1945年半ばの時点で秋田犬の残存頭数16頭と確定するに至ります。

その時、守衛は「ならば、もう何頭か増やさなくては」と考えるようになるのです。

戦後、ヘレン・ケラーが秋田犬を飼育している事が喧伝されたこともあって、アメリカ軍が駐留していた三沢基地の米兵の間では秋田犬が引っ張りだになります。誰もかれもがにわかブリーダーになります。生涯100頭以上の秋田犬を育てることになったにもかかわらず、守衛は1頭たりとも、子犬を現金と引き換えに譲り渡すことはありませんでした。

そして、守衛が育てた犬達は各地の展覧会で優勝を重ね、守衛自身も秋田犬保存会の審査員にも名を連ねるようになります。

しかし、姿が良く、色もいい、だがエネルギーを欠いた無気力な美犬がもてはやされ、守衛がめざす「いぬの精神を持っている秋田犬」とは目指すゴールが違ってきました。

守衛はマタギから猟の手ほどきを受け、熊猟の経験を重ねるにつれ、次のような人生を夢見るようになったからなのです。「たった一人、山の秘密を知りつくして、動物たちとともに生きる人生。技と知恵と抜け目のなさと、気性でもって、大自然の中で生き抜けるようでありたいと願う。きつと彼が犬の中に求めたすべての要素が、実は彼自身の中に欲していたものだったろう」と筆者は書いています。

秋田犬の保存の歴史書としてはもちろんの事、それ以上に大自然の中で育まれた夫婦愛と家族愛と人間愛に満ち溢れた珠玉のドキュメンタリーです。